

テキスト：鷺まこと



遠く、新宿の高層ビルが林立している。

ここに視界を遮るビルはなく新宿までが綺麗に見渡せる。

鴉が二羽。黒々とした腹を見せながら、悠々と飛び去っていく。

鴉が飛び去ったその向こうには、代々木上原のモスクが金色に輝いている。

眼下を望めば、屋根の上に、おじさんがよじ登っている。

瓦の上を裸足で歩いている様子で、足元がおぼつかない。屋根の上のペンギン——なぜそんな所を歩くのかは謎のまま。誰かが遠い昔に造り付けた小さな物干し場に洗濯物を干したついでなのだろうが。

大きな土蔵のような建物。街の中、横を通り過ぎるだけなら、普通の家にしか見えない。

猫になつて地を歩けば、無数の路地と屋根の連なりが、秘密の扉を開いて待っているのだろう。彼らの道案内をヒントに新しい風景を、発見する。

行き止まりに見える、その路地の奥に隠れている名店。ああ、まだこんな店が隠れていたのか、と幾度となく見出す喜びがある。

猫に導かれて歩く、スズナリ横丁。

その奥に聖母マリアが佇んでいる。

教会の裏手にひっそりと広がる芝生。洞窟を切り取ったような岩壁の中に彼女は浮かんでいる。

下北の中にある、聖域とも言える空間。アスファルトと四角い空ばかり見慣れているなら、足を踏み入れるときには息を呑むだろう。

おもちゃ箱のような街、下北沢。

開ける楽しみの尽きない街だ。

これら全て、この先、失われる風景。

一つの都市計画、何十年という昔に決まった眠れる計画が動き出した。

大きな道路を敷くという。木々のように生える信号。そしていずれは高層ビルの森。

月夜と共に浮かびあがるあちらこちらの呑み屋の灯りも消えてゆく。

代わりに現われるは、利便な道路、ビルの林と、新都市成立までの無人の夜か。

※いま下北沢では、小田急線の地下化に加え、都市計画道路「補助54号線」の着工準備が、

世田谷区によって進められている。着工されれば、狭い街路と

たくさんの小さな店々で成り立っている下北沢の街は、死んでしまうだろう。